

日本地質学会関西支部報

Proceedings of Kansai Branch, Geological Society of Japan

No. 86

1980年7月31日

日本地質学会関西支部（大阪市立大学理学部地学教室内）

日本地質学会関西支部昭和55年度総会および講演

日本地質学会関西支部昭和55年度総会および講演会は、6月21日(土)、神戸大学理学部において開催された。参会者の出足がおそく30分おくれて

午後2時開会。杉村新君を議長に選んで総会議事を行なった。引きつづき講演会にうつり、10の講演が行われた。午後5時30分閉会。

総 会 記 事

昭和54年度活動報告

○庶務報告

1. 支部登録会員数 331名（名誉会員3，一般会員328），（部会別：北陸20，京都105，阪神130，山陰17，四国40，管外9）
2. 総会及び例会の開催
支部総会を、昭和54年6月16日京都大学で開催。参加者31名，講演7。
3. 西日本支部から、慣例により昭和55年度に四国での合同例会開催について問い合わせがあり、10月に徳島大学で開催することを内定した（10ページの案内参照）。
4. 昭和55年度の支部役員選挙結果報告
支部長：中村 威（大市大）
幹事：阪神部会 八尾 昭（大市大）
〃 宮田隆夫（神戸大）
〃 両角芳郎（大自博）
京都部会 支岐常正（京都大）

北陸部会 杉本幹博（金沢大）

山陰部会 大西郁夫（島根大）

四国部会 須鎗和巳（徳島大）

○編集報告

関西支部報No. 85を発行（1979年7月25日）

○会計（決算）報告

収入	前年度繰越金	- 1,801 (円)
	本部からの補助金	36,100
	会費	213,400
	利息	684
	計	248,383

支出	支部報印刷費	54,300 (円)
	通信・郵送費	40,945
	事務・アルバイト費	30,774
	幹事会費	0
	次年度繰越金	122,364
	計	248,383

昭和55年度予算案

収入	前年度繰越金	122,364 (円)
	会費	256,000
	本部からの補助金	36,100
	計	414,464

支出	支部報印刷費	180,000 (円)
	通信・郵送費	100,000
	事務・アルバイト費	40,000
	部会補助金	20,000
	幹事会費	20,000
	予備費	54,464
	計	414,464

講演要旨

阿多火砕流堆積物の流動方向

鈴木桂子 (神戸大)
宇井忠英 ()

南九州に広く分布する阿多火砕流堆積物は4万年前に噴火した大型火砕流堆積物である。阿多火砕流堆積物の溶結部83地点で定方位試料を採集し、薄片中の結晶伸長軸方向を測定した。火砕流の流動方向は Schmincke & Swanson (1967), Elston & Smith (1970), Rhodes & Smith (1972) により給源カルデラから放射状の指向性をもって堆積すると述べられている。しかし、阿多の測定結果からは基盤地形が堆積直前の流動方向に影響を与えていると推定された。測定結果と基盤地形の関係は次のようになる。①巾1km以内の谷の底に堆積した試料は谷の方向を示す。②谷の側壁の試料は斜面の方向を示す。③火砕流台地を形成している所の表面近くの試料は大よそ供給源の方向を向く。

これらの結果は火砕流が基盤地形を埋めたてながら流動堆積する際、谷の底では谷に沿って流れ、側壁では斜面を流下するような地形を反映した流動をするが、基盤地形を埋めたてた後は供給源から放射状の流動方向が卓越すると解釈出来る。

一方、航空写真判読によると谷に堆積した阿多火砕流堆積物の分布上限高度が谷の両側で異なると推定出来る場合がある。分布上限高度は、薩摩半島南部では谷の西側で高く、大隅半島中部では谷の東側で高い。少なくとも薩摩半島側の加世田市南東庭月野付近で現地地質調査と原面高度測定を行ない、このことを確認した。供給源は大隅半

島・薩摩半島の間にあると考えられるので、谷の両側での分布上限高度差は供給源から遠方側が高くなっているといえる。即ち、谷に流入した火砕流が流動の下流側に片寄って堆積した大規模な構造である。薄片から求めた流動方向は局所地形に支配された小規模な構造であり両者の流動方向にちがいがあっても矛盾しているとはいえない。

鹿児島県根占地域の火砕堆積物

阪口圭一 (神戸大)
宇井忠英 ()

大隅半島中部の鹿児島湾に面した鹿児島県根占地域での第四紀火砕物の層序の改訂と、大隅半島に分布する田代火砕流中に見られる特徴的な岩相について報告した。

阿多火砕流(4万年)より下位の降下物は、これまで識別・対比が不明確であったが、下位から鳥浜火砕流に伴う鳥浜降下軽石、丸峯降下軽石、阿多火砕流に伴う阿多降下軽石及び火山灰からなることがわかった。鳥浜降下軽石はQ₂・Pl・Hyp・Hb・Mt・Il、丸峯及び阿多降下軽石はPl・Hyp・Aug・Mt・Ilの斑晶組み合わせであること、鳥浜及び丸峯降下軽石は20-23%、阿多降下軽石は6-9%の斑晶重量%であること、斑晶モード比で丸峯降下軽石がPlを70-72%、阿多降下軽石では82-84%含むことから3層の識別ができる。

田代火砕流堆積物は阿多火砕流(4万年)と大隅降下軽石・入戸火砕流(2.2万年)の間に位置する。大隅半島北部から南端部にかけて南北40km以上にわたって分布が認められ、供給源は根占付近

の鹿児島湾中と考えられる。根占地域では、下位の阿多火砕流堆積物の作る台地が侵食されてできた。比高150—200mの崖の上下に分れて分布している。堆積物中には以下の3つの特徴的な岩相が見られる。(1)阿多火砕流の大きなブロック (<1~20m) を含む岩相で根占付近の台地崖下に厚く分布する。(2)ゼノリス (~50cm) が多く、軽石・マトリックスの少ない岩相で台地上の端に近い場所に薄く堆積している。(3)軽石の多い岩相で台地上の盆地部や河川に侵食された場所に厚く堆積している。供給源に近く基盤の平坦な台地端では火砕流流動時にまだ横方向への運動量が大きく、重いゼノリスが選択的に堆積し軽い軽石・マトリックスの多くは通り過ぎてしまうために(2)の岩相を、供給源からより遠い基盤の凹みでは堆積物はより厚く、台地端であり堆積しなかった軽石を多く含むものが(3)の岩相を示すものと考えられる。崖下では供給源により近いが、150—200mの崖があるため、吹き溜りのようになって厚く堆積し、付近に多く露出していた阿多火砕流のブロックを含む(1)の岩相を示すものと考えられる。

神戸断層 (=五助橋+諏訪山+須磨) について

元木昭寿 (サンパウロ大)
杉村 新 (神戸大)

標題からこの中の3断層をまとめて、神戸断層と呼ぶ。本報告の最も重要な出発点は、元木 (1979, 火山24, p.55) の論文で既に明らかにした白亜紀火砕岩火道が、1.7km右ずれしていること(同論文 Fig.8) である。六甲山地に発達したと考えられる準平原面は、神戸断層をへだてて北側が500m高く、その面を侵食し始めて以来、住吉川などは1.7km右ずれに屈曲している。このことから、準平原面侵食開始以来、神戸断層は右ずれ1.7km・北上り500mの変位をしたと推定される。この右ずれ量は、上述火道の右ずれ量にほぼ一致しているので、準平原面侵食開始以前には、ほとんど活動していなかったと見なすのが、もっともらしい解釈であろう。

住吉川ぞいのいわゆる“段丘”は、土石流堆積

物と思われるが、その表面の高さは神戸断層をへだてて北側が60m高く、それを刻む川は系統的に右ずれをしめし、その量は平均160mである。土石流堆積物以後の神戸断層の変位は、右ずれ160m・北上り60mと考えられる。このような変位は縦横比が約1:3で、さきに述べた準平原面以後のそれと、ほぼ等しい。このことは、変位ベクトルの方向が定常的であるという、活断層によく見られる性質を、神戸断層も持っていることを示す。

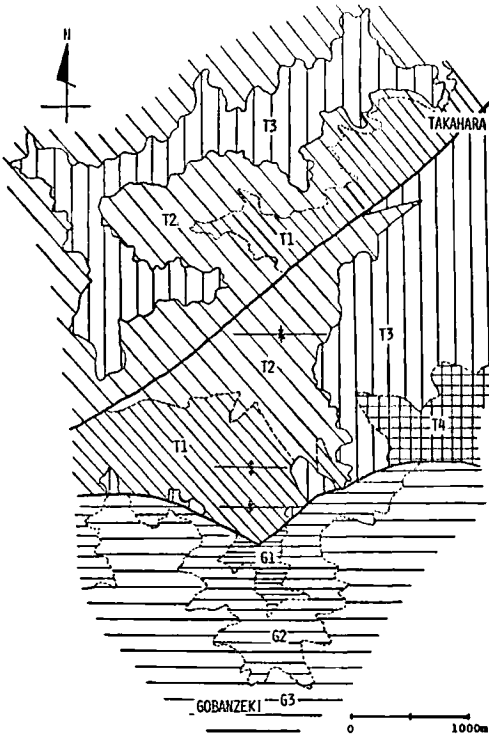
住吉川ぞいの土石流堆積物の年代は、何らかの方法で明らかにしたいところであるが、縄文海進以前の著しい海進のうち最も新しい下末吉期の高海面時を1つの候補と考える。現在の高度が高すぎるように思われるかもしれないが、六甲山地全体の隆起速度を考えれば決して高すぎることはない。もしこれが下末吉期とすれば、変位速度一様の仮定のもとに、神戸断層活動開始は、130万年ぐらい前と推定される。

紀伊山地中央部の秩父帯・四万十帯 —その6—高原川流域

竹花康夫(神戸大)
大和大峯研究グループ

紀伊山地中央部の高原川流域の地質調査を行なった結果、志井田 (1962) とは異なる見解を得たので報告する。

当地域は百丁茶屋・下多古川を通るほぼ東西走向、南傾斜の断層を境に2分される。北側の地域はみかけ上、下位よりT₁・T₂・T₃・T₄層に区分される。T₁層は泥岩・砂岩を主としブロック状・レンズ状の石灰岩・緑色岩類・チャートを含む。T₂層は砂岩・泥岩の互層を主とする。T₃層は厚層をなす石灰岩と緑色岩類からなる。T₄層は緑色岩類とチャートを主とする。みかけ下位のT₁・T₂層にはほぼ東西に近い軸をもつ褶曲構造が認められるのに対して、みかけ上位のT₃・T₄層はほぼ北西—南東走向で北東へゆるく傾斜する同斜構造をなし、両者の構造は斜交する。また化石による年代、破砕帯の存在からT₁・T₂層とT₃層はスラストで境されると考えられる。南側

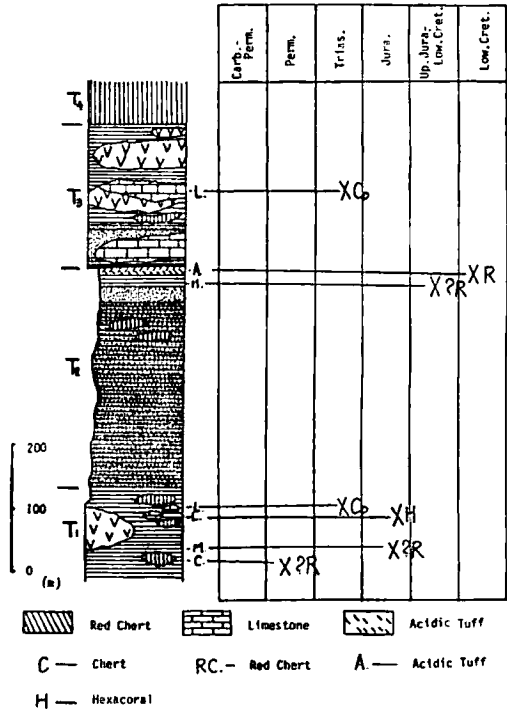
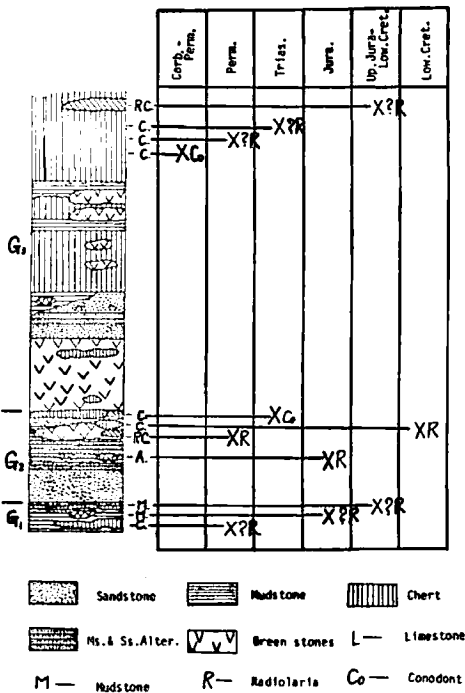


第1図：地質概略図

の地域はみかけ上、下位よりG₁・G₂・G₃層に区分され、ゆるく南へ傾斜する同斜構造をなす。G₁層はチャート・緑色岩類を主とする。G₂層は砂岩・泥岩を主としチャート・緑色岩類を含む。G₃層は緑色岩類・チャートを主とする。

第2図からわかるようにT₁・G₁・G₂・G₃層から種々の年代を示す化石が複雑な順序で産出する。さらに泥岩からはジュラ紀から白亜紀にかけての若い年代を示す化石が産出する。したがって、各層は産出化石の示すもっとも若い年代以降に複雑に再配列したものと考えられる。すなわち、T₁層では後期ジュラ紀以降、G₁層では中期ジュラ紀から前期白亜紀以降、G₂層では前期白亜紀以降、G₃層ではジュラ紀から白亜紀以降に再配列したと推定される。

以上の事から、T₃層は大普賢岳・大迫地域のB層に、T₄・G₁・G₂・G₃層はC層に相当し、秩父帯に属すると考えられる。T₁層は大迫地域のO層の岩相の一部に類似する。T₂層は砂岩・泥岩を主とする互層で、その形成年代は前期白亜



第2図：みかけの総柱状図と産出化石年代 左：南半分、右：北半部。

紀以降である。現段階では T_1 ・ T_2 層は O層に相当すると考えられる。

紀伊山地中央部の秩父帯・四万十帯 —その7—辻堂地域

竹内靖夫(神戸大)
大和大峯研究グループ

紀伊山地中央部辻堂地域の地質調査を実施し、あわせて放散虫化石による年代の検討も行なった。調査地域は辻堂を中心として 20 km 四方である。

本地域北半は、平山・神戸(1959)により、秩父古生層が分布するとされた。また、志井田(1962・1967)により、北から、秩父累帯西吉野層群(ペルム系)、四万十累帯天辻層群(トリアスジュラ系)、四万十累帯上野地層群(下部白亜系)が分布するとされた。

今回の調査によると、当地域は砂岩優勢層と泥岩優勢層に分けられる。全体の走向、傾斜は、ENE—WSW, $40^\circ \sim 50^\circ N$ である。泥岩優勢層は五帯に分布し、南より、第Ⅰ層～第Ⅴ層とする。各泥岩優勢層は、緑色岩類・赤色泥岩・赤色チャート・酸性凝灰岩・灰色チャートを伴う。第Ⅱ層の南限・第Ⅲ層の南限は、それぞれ砂岩優勢層と断層で接する。

赤色泥岩・赤色チャート・酸性凝灰岩・灰色チャート計44試料をHF処理し、20試料より年代決定に有効な放散虫化石を得た。放散虫化石は次の2群集に分けられる。

① *Mirifusus* sp. - *Protunuma* sp. cf.

P. brouweri 群集

② *Holocryptocanium* sp. - *Dictyomitra* sp.

cf. *D. torquata* 群集

大洋底堆積物や北米西部、ヨーロッパなどのデータによると、群集①は Hauterivian - Albian を示し、第Ⅰ層(大股南方)、第Ⅱ層及び第Ⅲ層のみかけ下位、第Ⅳ層、第Ⅴ層から産する。群集②は Albian - Cenomanian を示し、第Ⅰ層(田長瀬)、第Ⅱ層のみかけ上位から産出する。

化石の示す年代と、第Ⅱ層及び第Ⅲ層の南限が断層で境されることから、これら5帯の泥岩優勢

層は断層によってくり返している可能性が大きい。

以上の事実より、従来の見解とは異なり、当地域には白亜系が広く分布することが明らかになった。さらに、当地域の緑色岩類、赤色泥岩、赤色チャートの岩相及び産状は秩父帯とは異なり、各地の四万十累帯北半に見い出される岩相に類似する。したがって、放散虫化石の示す年代と岩相より、当地域に分布する地層は四万十累層群の一員と考えられる。

なお、本研究に際して、調査研究に御援助していただいた奈良教育大学西田史朗先生に厚く御礼申し上げます。

四国西部の鳥巢層群相当層の 放散虫化石群集

中谷登代治(大市大)

八尾 昭(ク)

愛媛県城川町地域の秩父累帯中・南帯の地層は岩相により A・B・C(中帯)、D・E・F・G・T・K(南帯)の9層に区分される。この地層区分は従来と若干異り、D・F・G層は従来の今井谷層群(上部ジュラ系、鳥巢層群相当層)、E層は古市累層(上部トリアス系～下部ジュラ系)の1部、T層は高川層群(中部～上部?ペルム系)の1部、K層は菊野谷累層(下部白亜系)とされた地層にそれぞれほぼ対応する。今回、E・F・G層は一連整合の層厚計500 m以上の地層であり、また、D層は周囲の地層と断層関係にあることが明らかになった。

放散虫化石の検討は、各層の泥岩・酸性凝灰岩・チャート計211試料をフッ酸処理し、そのうち比較的保存のよい放散虫化石を産出した27試料について行った。その結果次の5群集が識別された。すなわち、D層より *Unuma echinatus* 群集、E層及びF層下半より *Stichocapsa* sp. B群集、F層上半及びG層より *Dictyomitra* sp. A群集、K層より *Dictyomitra* cf. *carpatica* 群集、T層のチャート岩体より *Dictyomitrella* sp. A群集、一方、T層の酸性凝灰岩より *Dictyomitra* sp. A群集を産した。

各群集の組成および年代は以下の如く考察される。*Unuma echinatus* 群集は *Unuma cf. echinatus*, *Stichocapsa cf. convexa*, *S. cf. japonica*, 及び *Spongosatunalis cf. tetraspinus* などからなり, Yao *et al.* (1980) は美濃帯犬山地域のものに関して中期ジュラ紀後期のものと考察している。*Stichocapsa* sp. B 群集は *Stichocapsa* sp. B, *Sethocapsa cf. leiostraca*, 及び *Archaeodictyomitra cf. rigida* などからなり, *Dictyomitra* sp. A 群集は *Dictyomitra* sp. A, *Zhamoidellum* sp. A, 及び *Solenotryma* sp. B などからなる。従来, F ないし G 層より後期ジュラ紀のアンモナイトや三角貝化石が報告されている。今回, E・F・G 層から産出した上記の 2 放散虫化石群集も, Dumitrica (1970), Riedel & Sanfilippo (1974), Pessagno (1977) などに基づくと後期ジュラ紀のものと考えられる。*Dictyomitra cf. carpatica* 群集は *Dictyomitra cf. carpatica*,

Archaeodictyomitra cf. vulgaris などからなる。この群集は, その群集組成や, ほぼ同層準から産する三角貝化石に基づけば Hauterivian~Albian を示す。*Dictyomitrella* sp. A 群集は *Dictyomitrella* sp. A, 及びわずかな *Spumellaria* を含み, Yao *et al.* (1980) が美濃帯犬山地域において Ladinian~early Carnian と考察している。

以上の考察に基づき明らかになった主な点を以下にまとめる。すなわち, 上部ジュラ系と考えられる一連整合の E・F・G 層において, E 層及び F 層下半より *Stichocapsa* sp. B 群集が, F 層上半及び G 層より *Dictyomitra* sp. A 群集が識別された。周囲の地層と断層関係にある D 層は *Unuma echinatus* 群集を産し, E 層より層序的に下位の地層と考えられる。また, T 層は Ladinian~early Carnian のチャート岩体を含む上部ジュラ系と考えられる。

コノドントにより確認された
四国秩父累帯北帯の石炭系ドロマイト

磯崎行雄 (大市大)
松田哲夫 (ク)

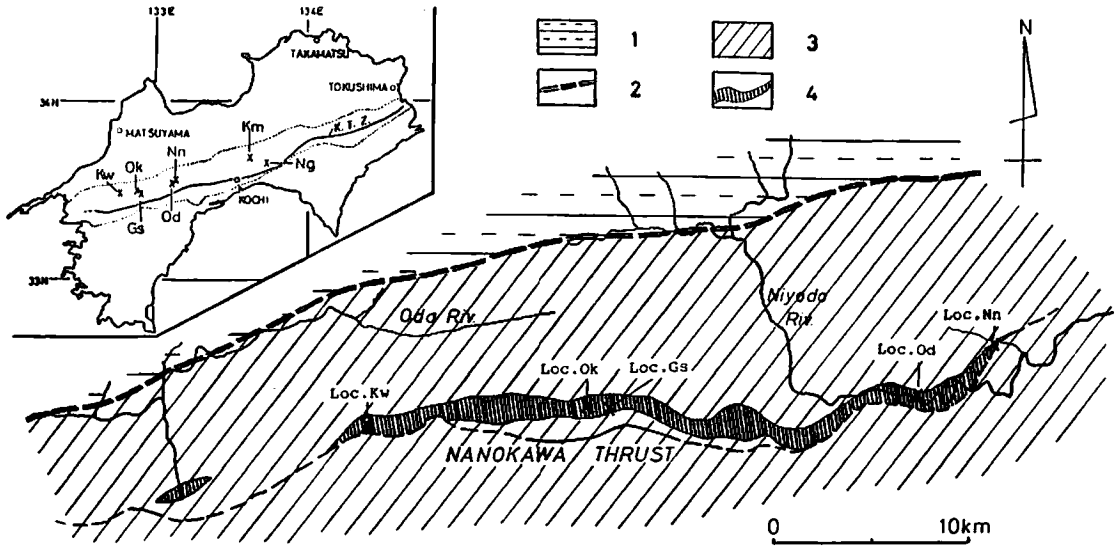
第 1 表: コノドントのリスト

Locality Specific Name	Kw	Ok	Gs	Odo			In	Km	Ng
				1	2	3			
<i>Idiognathoides sinuatus</i> <i>I. corrugatus</i> <i>I. cf. corrugatus</i> <i>I. aff. corrugatus</i>				X	X	X	X		X
<i>Gnathodus bassleri</i> <i>G. kanumai</i> <i>G. cf. kanumai</i> <i>G. cf. commutatus</i>			X	X	X	X			
<i>Cavusgnathus</i> sp.				X					
<i>Idiognathodus delicatus</i> <i>I. cf. delicatus</i> <i>I. sp.</i>			X		X	X			X
<i>Streptognathodus</i> sp.			X					X	
<i>Idiognathodontidae</i> gen. et sp. indet.	X								
<i>Gondollela clarki</i> <i>G. cf. clarki</i> <i>G. spp.</i>	X		X	X	X	X	X		
<i>Anahignathodus cf. minutus</i>						X			
compound-type element	X	X	X	X	X	X	X	X	X

高知県及び愛媛県の秩父累帯北帯には, チャートを密接に伴うドロマイトが分布する (平田, 1958; 木村・堀越, 1959; 鹿島・宮久, 1968)。ドロマイトはチャートと互層したり, リボン状もしくはノジュール状のチャートを含む。レンズ状のドロマイトがチャート中に含まれる場合もある。

筆者等は, 愛媛県喜多郡五十崎町川上 (Kw), 上淳穴郡小田町桶小屋 (Ok), 桶小屋南方五色河原 (Gs), 高知県吾川郡吾川村大渡ダム付近 (Od), 名野川渡西方 (Nn), 香美郡土佐山田町上穴内 (Km), 中後入 (Ng) の計 7 地点から試料を採取した (第 1 図, ただし地点 Km 及び Ng は磯崎 (1978) の Fig. 1 に示された地点 D2 及び B2 に各々相当)。

得られたコノドントを第 1 表に示す。大渡ダム付近のドロマイトは *Idiognathoides sinuatus*, *I. corrugatus*, *Gnathodus kanumai*, *Gondollela clarki* 等を産する。



第1図：サンプル位置図（20万分の1愛媛県地質図（1967）よりコンパイル）
 1.三波川帯主部, 2.清水構造帯, 3.三波川南縁帯（含御荷鉾緑色岩類分布域）
 及び秩父累帯北帯, 4.含ドロマイトチャート

これらのコノドントは北米の上部 Morrowan～下部 Atokan, 本邦上宝統から報告されている（Lane & Straka Ⅱ, 1974; Higgins, 1975; 猪郷, 1977). 他地点についても Idiognathodontidae 科の個体が卓越し、特に *Idiognathoides* 属を含む場合、その年代は後期石炭紀と考えられる。従来、四国秩父累帯主部で知られている石炭系は、鬼丸、秋吉、栗木、氷川統に限られ、そのほとんどは小規模な岩体である。御荷鉾緑色岩類近辺からは、最近上宝統石灰岩が報告された（須館他, 1980）。

今回年代の明らかになったチャートを伴うドロマイトがかなりの規模をもち、かつ側方への連続性もよい岩体であることは、トリアス系が広く分布すると考えられている北帯の構造を明らかにする上で重要である。特に、愛媛県東部（第1図）の場合、北帯内で重要な意義をもつ名野川スラスト（木村・堀越, 1959）に沿って含ドロマイトチャートが分布しており、ドロマイトの分布が北帯の大構造を解明する鍵になると考えられる。

DSDP Leg 67より得られたタービダイト質堆積物の粒度構成

山崎貞治（大教大）
 志岐常正（京大）

DSDP Leg 67 はグアテマラ沖の中米海溝を横断するようにして行われた。この航海で得られた海溝内堆積物のボーリングコアの中の第四紀堆積物層の上半分は、大部分がタービダイト質堆積物からなっている。このタービダイト質堆積物層のコアから代表的なものを選び、粒度組成の異なる斜交葉理を混合しないように注意しながら、2cm間隔の層位毎にサンプルを取り、粒度分析を行った。

粒度分析には国際電気株式会社製の超音波微粒子篩分装置を使用した。この篩分装置は正方形の穴のあいたフィルターの上に、アルコール中に拡散させた試料（0.1～0.05g）を乗せ、超音波で振動させながら篩分け行うものである。篩の目開きには、200 μ 、100 μ 、50 μ 、25 μ 、20 μ 、15 μ 、10 μ 、5 μ 、2 μ のものがあり、これより粗い粒径のものを含む場合には、標準篩を使用する。こうすると、篩を使用した粒度分析が最小 2 μ の粒径まで実施できる。

タービダイト質堆積物の粒度構成を全体としてみると、一見分級の悪い堆積物であるように見える。例えば、最大粒径 0.5 mm の粒子を含むものでも、 2μ 以下の粒子を数%含んでいる。しかし、 2μ 以下の粒子の粒度分析を行っていないので断定的な事は言えないのではあるが、タービダイト質堆積物内の各層位における粒度構成は少くとも2種類の性質の違った粒径母集団の混合したもののように思える。しかもこの2種類の粒子集団のうち、主体をなしている粗粒部部分集団はかなりよく淘汰されている(標準偏差 0.5 σ 以下)。この事は各層位における粒度組成を対数正規確率紙上に点示するとはっきりと認められる。タービダイト質堆積物層が、グレーディングしているように見えるのは、構成粒子集団が全体としてグレーディングしているというのではなく、粗粒部構成集団の粒径変化がグレーディングとして認識されるのである。又各層位における構成粒子の内、 2μ 以下の粒径のものは、粗粒部構成集団の平均粒径が大きくなるにつれて、含まれる量が少くなるようである。

GDP フィリピン海ドレッジ試料の再検討——リン酸塩岩について——

武蔵野実(京教大)

1972年より1977年にかけて実施された、GDP 研究航海では、フィリピン海北西海域の九州—パラオ海嶺、奄美海台、大東海嶺、沖大東海嶺などから多量のドレッジ試料が得られている。これらのうち、主にマンガン団塊の核をなすオリーブ色の半固結堆積岩については、そのかなりの部分がリン酸塩岩に属するものとされてきた。しかし、このことについては、すでに疑問が出され、沸石岩である可能性が指摘されていた。

GDP 航海が終了したのを機会に、従来ほとんど研究されていなかった堆積岩のフィリピン海における生成史を明らかにするため、上記の検討事項を含めて、組成分析を行ない、要約次の結果を得た。

1. 従来リン酸塩岩とされてきたものの多くは、灰十字沸石を主とする沸石岩である。

2. しかし、リン酸塩(リン灰石)は大東海嶺、沖大東海嶺では多くないが、全域に普遍的に認められる。

3. リン酸塩は、石灰質堆積物より変ったものであり、マンガン被殻の生成と密接に関連していると考えられる。

4. 灰十字沸石は、海域(とくに海山)では一般的に安定な生成物である。

5. 粘土鉱物としてはスメクタイトが多い。

MINERAL COMPOSITION OF THE "CARBONATE AND PHOSPHATE ROCKS" COLLECTED FROM THE NORTHEASTERN PHILIPPINE SEA (GDP CRUISES)

Location	Sample Number	Fe-Mn Coating	Phosphate	Carbonate	Zeolite	Clay Min.	Plagiocl.	
Kinan Smt Chain	8- 4*	-		Ar	P			770- 925
Kyushu-Palau Ridge	11- 2- 1			C, D				535- 550
	11- 3- 3			C				620-1350
	8- 7- 10	+	+					975-1165
	8-12- 14	+	+			I	+	2250-2280
	-285	+	+		P	S	+	
	-290	+	+		P	S		
	-291	+			P	S	+	
Amami Plateau	11- 8- 73	+	+		P			1580-1690
	11- 9			C				1350-1410
	- 1	+	+					
	- 1'	+	+		A	S		
	- 30	+	+					
	11-17- 1	+			P	I		1800-2110
	- 20	+			P	I		
Daito Ridge	15- 2- 43	+			P, A	S		2440-2505
	-135	+	+		P	S		
	15- 3-404	-	+		P			2375-2450
	-424	-		C	P	S		
	15- 4- 11	+			P	S, I		1160-1245
	-F13			C				
	-F22			C				
	15- 7- 16	+			P, A			2190-2580
	15- 8	-			P	I		3200-3400
	21-15			C		S, I		2918-3029
	24-13			C				2550-2625
Smt	15-15- 9	+				S, I		2640-3000
	- 10	+	+		P	S		
Oki-Daito Ridge	15-11- 2	+			P			2880-3700
	- 12	+			P	S		
	- 16	+			P	S		
	21- 5- 28	+			P	S, I		2730-2735
	-128	+			P	I		
	21- 6- 4	+	+					1970-1980

* including Mg-Al-sulphate hydrate mineral
Ar: aragonite, D: dolomite, C: calcite
P: phillipsite, A: analcite
S: smectite, I: illite

倉真層群綿泥岩層に関して

藤村俊夫(守口高)

静岡県掛川地方の小笠山北西方には、古期山地から南にはり出す新期丘陵がある。今回は、同丘陵北部、森川橋東北東約 0.5 km に露出する戸綿泥

岩層 (楨山・坂本, 1957) 最下位の概査観察事項について述べる。この地点の同層は節理の発達した塊状黒色泥岩で、散在的に保存の悪い化石を産する。化石は *Nipponomarcia nakamurai*, *Cultellus izumoensis* の貝化石のほか、サメの歯 (*Carcharodon megalodon* とと思われる)、植物片

などが見られた。この群集は多様性に欠け異地性のものである。また、これらの化石が運搬された距離は長くなく、B 1950.0のそれより高い古水温の海流が卓越する公海につながる、開いた湾の湾縁の深度10m以深の浅海底に堆積したものと思われる。

日本地質学会関西支部・西日本支部合同例会（徳島大会）のご案内

日程：昭和55年10月10・11日

10日（金）講演会 9：00～17：00

懇親会 18：00～

11日（土）巡検（吉野川流域の三波川帯と
中央構造線）

会場：徳島大学教養部

〒770 徳島市南常三島町1-1

T E L. (0886) 23-2311

講演申込み・巡検及び懇親会の参加申込み：

8月31日までに届くよう、徳島大学教養部
地学教室宛はがきにて申込み下さい。

なお、巡検に自家用車で参加される方はそ
の旨併せてお知らせ下さい。

宿泊：旅館・ホテルの予約は各自で直接お申込み
下さい。

うずしお荘（国公共済）53-7248（3,150円～）

大学まで直通のバスの便はありません。

プラザイン・トクシマ 26-1717

（素泊り 4,000円）

ビジネスホテル・トクシマ 52-6131

（ 〃 3,500円）

徳島グリーンホテル 22-1333

（ 〃 4,000円）

（徳島市外局番0886）

支部会費納入のお願い

総会を経て、新しい年度がスタートしました。今後2
年間は阪神部会が運営を担当することになります。つき
ましては、同封の振替用紙をご利用になり、昭和55年度
支部会費を納入して下さいますようお願い致します。

振替口座 大阪 91572

〒558 大阪市住吉区杉本町459

大阪市立大学理学部地学教室内

日本地質学会関西支部